

国際理解教育の視点を生かした中学校音楽科の取り組み

東京学芸大学附属竹早中学校 居 城 勝 彦

目 次

1. 音楽科の現状と新学習指導要領	120
1. 1. これまでの中学校音楽科に見られる世界の音楽	120
1. 2. 新学習指導要領での新たな内容	120
2. 音楽科で活用できる国際理解教育の視点	120
3. 先行実践に見る国際理解教育	121
3. 1. 「こもりうた」を題材とした実践（中学校音楽） ¹	121
3. 2. 「国際理解教育における自文化理解のあり方」（中学校美術） ²	121
3. 3. 先行実践から活用できる要素	121
4. 中学校音楽科のカリキュラム	121
4. 1. 小中連携カリキュラムとしての「音楽文化」のとらえかた	121
4. 2. 中学校音楽科としてのカリキュラム	122
5. 国際理解教育の視点を取り入れた実践例	122
5. 1. 世界の音楽を聴こう（2年生1学期）	122
5. 2. 和太鼓アンサンブルをつくろう（2年生2～3学期）	123
5. 3. 卒業生に贈る合唱「聞こえる」（2年生2～3学期）	123
5. 4. 音楽の歴史を知ろう（3年生1学期）	123
5. 5. 「帰れソレントへ」を聴きくらべよう（3年生1学期）	124
6. 実践による成果と今後の課題	124

国際理解教育の視点を生かした中学校音楽科の取り組み

東京学芸大学附属竹早中学校 居 城 勝 彦

1. 音楽科の現状と新学習指導要領

1. 1. これまでの中学校音楽科に見られる世界の音楽

日本の学校教育における音楽は、長い間、ヨーロッパを中心とした西洋音楽を主な教材として行われてきた。1958年の学習指導要領では「わが国および世界の音楽文化に対する正しい理解を得させ、すぐれた音楽を継承し、わが国の音楽文化を向上させようとする基礎的な態度を養う」という文面が見られる。このように世界の音楽文化という取り上げ方はされているが、そのほとんどが西洋音楽であることは共通鑑賞教材を見れば明らかである。

1989年の学習指導要領では、文化と伝統の尊重と国際理解の推進が改訂の基本方針の中に盛り込まれ、音楽科では国際理解の観点から日本を含めた世界の多様な音楽に親しむことが重視されるようになった。教科書にもアジアをはじめとする世界各地の音楽がとりあげられた。

1999年の学習指導要領では、多様な作品の中から教材を選択できるように共通鑑賞教材という扱いがなくなった。しかし、これまで取り上げられてきた鑑賞教材の多くは教科書にとりあげられており、授業の中で指導されることが多い。また、1つ以上の和楽器も演奏するようになり、日本音楽の扱いは手厚くなってきた。

これまでの流れを見ると、音楽科における国際理解は、国際化の進展にともない、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深めることで、我が国の音楽文化に愛着を持つことが優先され、その結果として諸外国の音楽文化を尊重するようになるという考えに基づいていることがうかがえる。

1. 2. 新学習指導要領での新たな内容

現状の中学校音楽科の指導における合唱活動への偏重、創作活動の軽視を改善するために、新学習指導要領では合唱活動の重要性は認めながらも、創作活動への取り組みがなされるように具体例が示されている。

また、表現・鑑賞の両方を通じて指導すべき内容として「共通事項」が新設された。これまでも指導されているであろう事項がほとんどだが、共通事項を指導するために授業を展開するものではないということまで学習指導要領では述べられている。

さらに全教科領域にわたる言語活動の重視から、音楽科では鑑賞領域において批評文を書くことが内容として盛り込まれた。

以上のような内容が新学習指導要領のトピックとして触れられることが多く、国際理解については文言はあるものの、特別取り上げて語られることは少ない。

2. 音楽科で活用できる国際理解教育の視点

国際理解教育の視点の集約としていくつかの方法があげられているが、ここでは音楽科の学習活動に最も有効であると考えられる大津の「体験目標」「知識・理解目標」「技能目標」「態度目標」という4つの側面³を活用することとする。これらは、従前の音楽科の学習内容を国際理解教育の面からとらえ直したり、発展させたりすることに関して有効であると考えたからである。

3. 先行実践に見る国際理解教育

3. 1. 「こもりうた」を題材とした実践（中学校音楽）⁴

加藤・奥は、音・歌・音楽はグローバル教育の視点からとらえられることが必要であると考え、そのために音楽を文化として体験し、生活における音楽の持つ意味を理解することが必要だとしている。ここでは自文化を理解し、その上で異文化である諸民族の音楽を体験・理解するという段階を踏んでいる。

この学習は、郷土の「こもりうた」と世界の「こもりうた」の共通性と固有性を足がかりとして、生活の中の音楽を理解させている。音楽はどの時代の、どの民族においても生活文化とつながりを持つもので民族の音楽を理解することは、まさに民族の文化の総合的な理解につながるとまとめている。

また、共通性や固有性を手がかりとして音楽の背景にあるものを学習し、そこから音楽的なものに帰ってくるというスパイラルな学習が可能である、と述べている。

3. 2. 「国際理解教育における自文化理解のあり方」（中学校美術）⁵

森は、国際理解教育が異文化理解に関心が集まることが多いが自文化理解も重要な意味を持っているという考えから、外国美術だけでなく日本美術の学習の充実が大切だと述べている。

自文化理解に役立つ授業実践においては、題材選択に関して「日本の文化や伝統に触れることのできる題材」「日本の文化と外国の結びつきを認識できる題材」、表現活動の工夫に関して「理解を深めるための発想や構想の表現」「理解を深めるための技法体験」をあげている。

授業実践は3年生を対象に、「禅の美」として水墨画（山水画）と枯山水庭園を取り上げている。

実践のまとめとして、「自文化理解」「異文化理解」の内容を相互に補完しあって学習することが効果的であると述べている。また、複数の教科と連携し合って、多面的にアプローチしていくことが大切であるとも述べている。これは年間35時間という音楽と同じ時間数の中で表現活動の時間も保障しながら、国際理解教育を目指そうというためのものであろう。

3. 3. 先行実践から活用できる要素

「こもりうた」を題材とした実践では、「共通性や固有性を手がかりとして音楽の背景にあるものを学習し、そこから音楽的なものに帰ってくるというスパイラルな学習」という考え方が活用できよう。この実践では、自文化である郷土の「こもりうた」の音楽的分析から始まっているが、取り上げる題材によっては異文化としての音楽から入り、自文化としての音楽に迫るという流れも考えられるであろう。場合によっては、その方が子どもたちにとって、より身近に感じられる音楽からのスタートになることが考えられる。

「禅の美」を題材とした実践からは、表現された作品を鑑賞し合う活動が音楽の学習でも有効であると考えられる。授業では時間が限られているからという理由で、スタンダードなもの1種類の鑑賞で済ませてしまうことがある。しかし、表現の共通性や多様性に子ども自身が気づくためには、その機会や時間を設けることが必要である。

また、他教科との関連をはかることも音楽科では必要である。音楽文化の背景となる気候風土や歴史などを意識させるためには、他教科での既習内容が必要となる場合が多い。まずは、他教科の学習の進行状況を調べながら、それに合わせるように音楽科のカリキュラムを調整していくことから始めることにする。

4. 中学校音楽カリキュラム

4. 1. 小中連携カリキュラムとしての「音楽文化」のとらえかた

本校では併設する2年保育の幼稚園、小学校と11年間に渡る幼小中連携教育に取り組み、「主体性を育む」

を研究テーマとしている。その中で音楽科では、小中の連携カリキュラムを平成24年度の完成を目指して、実践を積み重ねながら作成している。音楽科ではこのカリキュラムの内容軸に「場・手段・関係・文化」の4つをもうけている。この4観点は、ともに研究を進めている図画工作・美術科と研究を進める中でカリキュラム作成における共通の内容軸としている。⁶

まず、音楽文化を含むこれら4つの内容軸について概説する。

1つ目の「場」とは、子どもたちがより主体的に音楽活動に取り組むために、どのような活動領域、学習形態を選ぶかを記すための項目である。

2つ目の「手段」とは、子どもたちがより主体的に、そして、豊かに表現するために、音楽活動の中で、何に注目させるかを記すための項目である。新学習指導要領の内容の多く、特に共通事項は、ここに位置づけている。

3つ目の「関係」とは、子どもたちのどんな関わりあいの姿が、音楽活動の学びにつながっているのか、子どもたちの音楽的成長として意味があるのかを記すための項目である。

4つ目の「文化」とは、その教材を扱うことやその音楽活動を行うことで、どんな音楽的・歴史的背景にふれられるのかを記すための項目である。図画工作・美術科との共通性をはかるために「文化」としたが、この項目がまさに「音楽文化」の部分である。連携カリキュラムでは、子どもたちの発達段階や他教科との学習の関連を考え、小学校高学年から中学校にかけてこの項目が厚くなるようにしている。

また、この「音楽文化」をどのようにとらえ、実践していくかにおいては、国際理解教育の視点が有効であると考えている。

4. 2. 中学校音楽科としてのカリキュラム

これまで述べてきたことを構想・実践の基礎として、2009年度のカリキュラムを作成した。本年度の大きな変更点としては、クラス授業での器楽合奏がリコーダーから箏になったことである。これは、昨年度末に箏9面が購入でき、これまで所有していたものと合わせ22面がそろったことにより可能となった。

また、1年生に和太鼓によるアンサンブルを取り入れたことで、本校では和楽器として3年間のうちに箏と和太鼓を経験することになる。それは和楽器を活用した活動が中学生にとって、既習の音楽経験の差に左右されることがあまりなく仲間と表現できる「場」であり、音楽科の学習内容（とくに共通事項）を焦点化して扱いやすい「手段」であり、お互いの思いや考えを音で確かめ合う「関係」が作りやすい活動で、歴史的背景や他の地域の音楽との共通性を「音楽文化」として見出しやすい活動であるにとらえているからである。

5. 国際理解教育の視点を生かした実践例

ここでは、2008年度および2009年度に実施した活動から国際理解教育を意識した実践をあげる。

5. 1. 世界の音楽を聴こう（2年生 1学期）

教科書題材「楽器とともに生きる」7を活用し、世界各地の音楽から7種類を取り上げ、視聴した。教科書では弦楽器・管楽器・打楽器という種別になっているが、授業では「フォルクローレで用いられるチャランゴ（元々はアルマジロの胴体を使った弦楽器であるが、現在は木製）が、なぜ使われるようになったのか」という発問から西洋人によって音楽を禁じられたアンデスに住む人々がボンチョの中に楽器が隠せるようにギターを小型化したことから生まれたことに触れた。

また、トリニダード・トバゴのスティールドラムの明るく迫力ある演奏も、アフリカからつれてこられた人々が支配者から太鼓を禁じられ、油の廃缶を使って作り出したことに触れたあと、彼らのルーツであるアフ

リカのジェンベの演奏を視聴した。

子どもたちにとっては、音楽が禁じられるということが意外だったようだ。異なる地域であるにも関わらず、人々がなんとかして音楽を生活の中に取り戻そうという共通した姿があったことを知る機会となった。

この活動は、世界の音楽の文化的多様性を知るとともに、その成立の背景に似たような歴史的状況があったことに気づくという、知識・理解目標を設定した。

5. 2. 和太鼓アンサンブルをつくろう（2年生1～3学期）⁸

サンノゼ太鼓という日系人和太鼓グループの演奏⁹を参考に、締太鼓と長胴太鼓を使ったアンサンブルをグループで創作して演奏を発表した後、日系人の歴史や演奏者の和太鼓演奏に対する思いについて考えた。日系人の歴史については紙芝居をグループで読み合う活動で、情報を整理し、理解することとした。ここではメディアリテラシーや社会科の歴史学習で得た知識も活用された。学習の終末で「日系人とは…」や「日系人和太鼓とは…」というような共通の答えは導き出していないが、今まで考えることの無かった、日本から離れたところにある日本をも感じさせる音楽文化に気づき、自分なりに考えようとする機会となった。

この活動は音楽科の学習としては、和太鼓演奏の鑑賞から表現の特徴を感受する、和太鼓の演奏技能の習得する、仲間と協同しての作品を創作する、音楽的な表現の工夫をするという側面があるが、国際理解教育としては日本から離れたところにある日本らしい文化に気づくという知識・理解目標と、紙芝居¹⁰というメディアから必要な情報を獲得し、仲間との意見交換の中で自分の考えを持つという技能目標を設定した。

また、全ての子どもを対象にすることは出来ないが、日系人和太鼓演奏者の帰属意識問題への気づきを発展させ、人間としての尊厳を考えるという態度目標の設定も可能であることがわかった。

5. 3. 卒業生に贈る合唱「聞こえる」（2年生2～3学期）

本校では、卒業式に学年合唱の演奏を贈り合うことが恒例となっている。2008年度の2年生は混声4部合唱「聞こえる」（岩間芳樹作詞 新実徳英作曲）を演奏した。より豊かな歌唱表現のためには歌詞の解釈が重要である。この曲は平成3年度NHK合唱コンクールの課題曲であるが、その歌詞には、当時世界で起きていたことが歌い込まれている。そこで歌詞に歌い込まれた出来事について調べる活動を行った。それぞれの出来事についての一次検索としてはWikipediaの利用を許可したが、そこで終わらせずに、書籍や公式HPにあたることを条件とした。ここで調べる対象となった出来事は、「天安門事件」「ベルリンの壁崩壊（東西ドイツ統一）」「湾岸戦争」「チェルノブイリ原発事故」などであるが、いずれも子どもたちにとっては生まれる前の出来事であり、ただ歌詞を読んだだけでは内容がつかみづらい。各自が調べた内容は1つのできごとについてであったが、音楽室に全てのレポートを掲示して、情報の共有化をはかった。こうすることで、歌詞に込められた内容を理解し、その理解に基づいて自分たちの表現を工夫する活動が展開された。

この活動では、教師による歌詞の解釈や歌唱表現の熟達で終始せず、世界で起きていた様々な出来事と現在にも残る影響について調べて情報を共有するという、知識・理解目標とメディアリテラシーの活用という技能目標を設定した。また、音楽の表現を深めるための方法は、歌唱の練習だけではないということを経験することができた。

5. 4. 音楽の歴史を知ろう（3年生1学期）

古代から現代に至る約2000年の西洋と日本の音楽の歴史を概観し、音楽史上の時代区分とそれぞれの音楽の特徴を知る学習である。各時代の特徴的な音楽を視聴し、その歴史的背景や文学、絵画といった他の芸術との関連について紹介した。またルネサンス期と室町時代、古典派、ロマン派と江戸時代のように、西洋の音楽

を概観しながら、その頃の日本の時代と音楽についても触れている。これは、小学校・中学校音楽科の鑑賞教材のほとんどが西洋音楽の楽曲を中心に構成され、それらを整理しながら授業を進めるための流れである。明治時代になると西洋音楽が日本にどんどんと入るようになり、現代では世界的に著名な日本人作曲家や演奏家がいることにつながっていることも触れた。

ここではそれまで、整理されることのなかった西洋音楽と日本音楽を歴史的に並べてとらえることで、それぞれの対比や影響を及ぼし合うようになった歴史的背景について学ぶという文化的多様性や共通性に関する知識・理解目標を設定した。また、まとめの活動として、現代の実験的な音楽を取り上げることによって、西洋音楽の流れがよりグローバルなものとして展開されていることに触れ、さまざまな音楽に対して寛容に接することのできる態度を養うという態度目標も設定した。

5. 5. 「帰れソレントへ」を聴きくらべよう（3年生 1学期）

代表的なカンツォーネ「帰れソレントへ」を日本語とイタリア語で歌唱することを通して、外国語での歌唱に慣れることと、イタリア語の歌詞における重要な言葉（再び会うことのない別れを意味する“addio”を取り上げた）から音楽表現の工夫を考えた。また、この曲がもともとソレント岬のリゾートホテルのCMのために作られた曲であることから、自分たちが現在視聴しているCMソングについてその特徴と効果について考えた。

さらに、毎回異なる演奏家の歌唱を鑑賞し、その違いについて考えた。パヴァロッチやマリオ・デル・モナコのベルカント唱法、1930年代のジョヴァンニ・マルティネッリの短編映画、ロックも歌いこなすラッセルワトソンのライブ映像、グループで歌うアミチフォーレヴァーの演奏を取り上げた¹¹。演奏者の個性だけでなく、歴史的背景や演奏形態の工夫などで同一曲であっても多様な表現が可能であることについて考えた。

ここでは、音楽の多様性について考える知識・理解目標とメディアリテラシーの一部としてCMソングの仕組みについて知るという技能目標を設定した。

6. 実践による成果と課題

これまで、子どもたちは音楽の学習を音楽という枠の中だけで行おうという意識が強かった。しかし、これまであげてきた実践を取り組むことで、音楽は他の教科や実生活とのつながりをもっていることに気づく子どもが増えてきた。中学生、特に後半の時期はクラスという集団で1つの表現をつくることより、自分一人で音楽を楽しむことや気の合う仲間と音楽を楽しむことに喜びを感じる傾向にあることは、これまでの経験から感じている。発達段階からするとそれも大事なことではあるが、日頃ともに生活する仲間と音楽ができる最後のチャンスでもある中学生には、仲間と表現することを存分に経験してもらいたい。しかし、ただ表現活動の機会を連続させていくだけでは、活動に深まりが生まれにくい。知的好奇心の高まる時期だからこそ、音楽の持つ多様性に気づかせ、それを自らの表現や音楽活動に生かすようにさせたいと願っている。そのためには国際理解教育の視点は有効であると考えられる。今回、実践例であげた活動は中学校音楽科の表現や鑑賞の活動として、よく行われているものやそれらに発展的活動を加えたものである。各活動を「音楽教育」としての視点とともに「国際理解教育」という視点を持って計画・展開することで、限られた時間の中でより発展的な学習が可能であることが成果として明らかになった。

次に、今後の課題についてまとめる。13でも触れたが、新学習指導要領の内容のうち新設された「共通事項」と「根拠を持った批評文」が取りざたされている。現場の教員が購読することの多い「教育音楽」でもこの2つの内容について特集が生まれ、実践例などが掲載されている¹²。「共通事項」はこれまでも授業での活動を通して触れてこられたはずである。どの学年でどの内容をという指定がある訳ではないので、実際に活動

の様子から必要な内容に触れるようにすれば、3年間（小学校と合わせれば9年間）で無理なく学習できるであろう。また、批評文については、音楽科の学習が学力育成にも貢献していることを示すために設けられたという説明もあり¹³、本来ノンバーバルなコミュニケーションの手段である音楽において、言葉を用いて巧みに表現することが音楽を愛好する心情を育てることにどれほどつながり、豊かな情操を養うことに効果的なかはわからない。鑑賞活動において、音楽的諸要素をあげて定型文のような批評文が並ぶようなことが本当に音楽科の目指すところなのだろうか。

このような流れの中で、音楽文化について多くが語られることはない。しかし、音楽科の学習では、元々奈良時代の雅楽や中世のグレゴリオ聖歌から、子どもたちが日頃の生活の中で耳にする音楽までが題材となりうるのである。これまで述べたように、これらの題材を音楽文化としてとらえて活動を展開することで、文化的背景や歴史的背景を知ることや、過去の音楽と今現在の生活の中にある音楽とを結びつけて考えることが可能になる。また、国際理解という視点を持ってカリキュラムを構成することで、世界の音楽の多様性や歴史をとらえようとする姿勢が養われるはずである。学習指導要領において新たな内容が盛り込まれたが、何か削減されたわけではない。また、授業時間数が増えたわけでもない。このような現状で音楽の授業を豊かに発展させるためには国際理解教育の視点は有効であるはずである。

ただし、このような考え方が広がるにはいくつかの課題を解決する必要があるだろう。

第一に、他教科の内容とのリンクをはかることである。社会科のように時系列で単元が配置されている教科に対しては、音楽科のカリキュラムを調整し、時期を合わせるなどの工夫が必要である。また、担当教員同士での打ち合わせをし、合科的な授業やTTなどの柔軟な対応で、活動の幅が広がるだろう。

第二に、アウトリーチの活用である。表現活動が中心にあるべき教科としては、鑑賞活動といえども、生演奏に触れることの価値は大きい。人材以外にもモノのアウトリーチも必要である。どんなに有用な視聴覚資料や教材があっても、学校予算ではそろえることに限界がある。そこでアウトリーチとしてこれらを利用することや、実践事例の添付された教材キットなどが有効であろう。

以上のような課題に対してできるところから解決しながら実践を続け、その情報を共有することで、子どもたちにとって人生最後となるかもしれない中学校音楽科の学習を、より豊かにしていくことが必要である。

-
- 1 加藤晴子 奥忍「国際理解と学校音楽教育-「郷土のこもりうた」から「世界のこもりうた」へ-」岡山大学教育実践総合センター紀要第2巻（2002）
 - 2 森敏和「国際理解教育における自文化理解の在り方-中学校美術の鑑賞を通して」香川県教育センター研究論文（2007）
 - 3 大津和子「国際理解教育の目標-四つの側面-」日本国際理解教育学会『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』（2006）
 - 4 加藤晴子 奥忍「国際理解と学校音楽教育-「郷土のこもりうた」から「世界のこもりうた」へ-」岡山大学教育実践総合センター紀要第2巻（2002）
 - 5 森敏和「国際理解教育における自文化理解の在り方-中学校美術の鑑賞を通して」香川県教育センター研究論文（2007）
 - 6 居城勝彦 谷本直美「日本の伝統的な音楽を素材とするカリキュラム試案」東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校 平成20年度研究紀要（2009）
 - 7 本校で使用している教科書は「音楽のおくりもの」教育出版である。
 - 8 2007年度の実施内容については日本国際理解教育学会第18回大会で発表した。また、2008年度の実践に関しては東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校 平成20年度研究紀要にまとめている。

- 9 San Jose Taiko 「Free Spirit」 DVD 『CELEBRATING 3 DECADES』 (2007)
- 10 中山京子 (2005) 『海を渡った日本人』 を JICA 横浜海外移住資料館から 7 セット分アウトリーチ教材として借りて使用した。
- 11 DVD 「LUCIANO PAVAROTTI IN RECITAL」 (1984), DVD 「偉大なる名歌手たち」 (1996)
DVD 「RUSSELL WATSON “THE VOICE”」 (2002),
DVD 「AMICI FOREVER IN CONCERT」 (2005), CD 「Mario Del Monaco Song Album」 (2001)
- 12 共通事項に関しては「教育音楽 中学・高校版」(音楽之友社) 2008年11月号、批評文に関しては同12月号において特集が組まれている。
- 13 2008年8月11日、日本教育大学協会全国音楽部会における西園芳信氏の講演内容より。